

第12回 こうしてマイは失われたものたちの物語に耳を傾ける

雨が降り出して、闇がよりいっそう深まる。

「これでどうすりやいいんだよ？」

ぼやかずにはいられない。

——どうすりやいいのかって、それはですね、まっすぐに行けばいいんだよ。そうに決まってるじゃん。決まってるんですかねえ？ どうしてまっすぐに行くのかって？ ずっとまっすぐだったから。まっすぐ走って、ウミネコに追いつこうとしているんだよね。だって、ちよつとあせってるじゃないの。だから、そういうことなんですよ？ そりゃあね、羽根を渡すって約束したわけではないですよ。それでも、こういうことになってきちやっただよ。なんだかわからないことがいっぱいあってですよ、なんだかわからないけど、

こういうことになっちゃったんだよ。

闇の中で自問自答する。

——まっすぐに行くたつてさあ、これが正しい向きだという保証はどこにもありませんよ。まさにやみくもだ。まっくらなこの雨のどこかにウミネコがいたとして見つけられるんですかねえ？

「これでどうすりやいいんだよ？」

自問自答のぐるぐるまわりを続けていても仕方ないので、景気づけに大声を出して足を速めてみる。

「たいくらはやしか、ひらりんか、いちはちじゅうのもくもく、ひとつや
つつでとっききき」

声は闇に吸い取られ、景気づけはむしろ逆効果になる。

——そもそもこいつをやったのがまずかった？ 家に帰りたくなくて、これで勢いをつけて角を曲がったのが最初の始まりだったんだよなあ。それで、こういうことになってきちゃったんだよ、なんだかよくわからないうちに。

あんときボクはどうしたかったんだろう？ 何もかもやめてしまいたいと、たしかにそう思っていた。だけど、それってどういうことだったんだろう？ 死ぬ気なんかはないって思いもしたけれど、ホントはどうだったんだろう？ よくわからないよ。でも、あんときによくよく考えたら、もしかして、こうやって雨の降るまっくら闇の海を走るのを望んでいたりしたのではなかったんだろうか？ ん？ そんなことってある？ いったいだれがこんなことをするって想像します？ ありえないでしょう。でも、ここでこうしているのは望んでいたから？ そうじゃなかったら、どうしてここにきた？ それでもって、いまのボクはホントは何をしたがっているんだ？

「あなたはきつと自分からすすんで裁判に出ようとするようになるでしょう」
アシタバがそう言っていた。

——それはいいです。はつきり言います。「知恵の裁判」なんてなものには関係ないんだもの。石ころをけったから始まったんだって、キョンは何度も言ってたけど、そんなことで勝手に決められては困る。あんとき「ちく

しよう！」って、はずみでけっただけだよ。石ころが勝手にあそこにいただけじゃないか。だいたいですよ、石ころのヤツはどっかに行つてしまひましたよ。だったらもう終わりでもいいでしょうに。まだ続いてるってどういうこと？ キョンが言つていた通り、始まつたからにはどんどん進んで行くつて、それだけのこと？ つまり「慣性の法則」ってやつ？ ウミネコを追いかけなければならぬ理由なんかないけれど、ここまでまつすぐに走つてきちゃつたから、なんか止まつたり曲がつたりするのがいやだつてことだけなのかも。熱帯の木にもどいてもらおうとしたもの。「慣性の法則」というだけで、ボクがしたいと思つてゐるわけではない。ん？ そうなのかなあ？ そういうことでもいいのかなあ？

「これでどうすりやいいんだよ？」

——金色の尾羽のウミネコもまつすぐに飛んで行つた。それはどういふことと？ やっぱり「慣性の法則」？ ボクとは違いすぎるからわかりようがないよなあ。だつて、あのウミネコは島でいちばんだというけど、ボクつてい

うのは……。

「あなたはそういう人なのです。あなたはきつとそうだとわたしは信じています」

アシタバはそう言っていた。

——勝手に信じられてもなあ。ボクのことをわかっているんですかねえ？
そもそもボクってどういう人なんですか？ えーと、だから、ボクっていうのはですよ、「ちよいとごめんよ。おいらゴローっていうんだ」……つまり、そういうことでしょう。ボクはゴローなんです。いろいろなつらくて、こわくて苦しかったけれど、オバコちゃんや「ゴロー君はそれでいいのよ」って言うてくれたから、ゴローになろうってのはつきり決心できたんだ。でも、ほかの人は「気持ちわる〜」とか、結局、だれもわかってくれなかった。ボクは反発した。ボクっていうのはもともとそういう人なんです。いつだってみんなとは違っちゃうんだよ。くじけたらいけないって思うから、よけいにそうなる。それで、ろくでもないこんな世界の大人になんかなりたくない、

…
いっそもかもやめてしまいたいって思ったりしたんだ。でも、ゴローは…

GOROの刺繍に触れ、

——だってさ、与太郎さんは愚か者でも落語の世界の大スターなんだよ。ゴローだって、ゴローだって……。だから、この夢の中で、何かのパクリでもいいから、ゴローっていうのはカツコよくニヒルとかって思ったんだ。そして、あのカンガルが出てきたんだ。なんか違うよなあっていうことになったら、浦島太郎やらおネエ系やらペンギンやらイルカやら後から後からいらんなのが出てきて、いろんないろんなことがあって、それでこうやって走ってきて、それでもってゴローはどうなったんだろう？　いまのボクは？　夢の中か外だか知らないけど、このボクはホントは何をしたがっているんだろう？　ボクっていうのはどういう人なんだ？

「これでどうすりやいいんだよ？」

自問自答の渦巻きの中にあるマイの耳に、ふっと大ダコの声が聞こえる。

「おまはんはオレさまのなかまではないか」

——なかま？ なかまなんですか、あんな大ダコなの？ あんときは、「へっ？」
って思ったけど、でも、どうなんだろう？

大ダコが思案していたときの奇妙な姿を思い出すと、心の内がぽつと温かくなる。

——へんなヤツだったけど、でも、どうなんだろう、あれはあれで悩んでいたみたいだし、案外とボクのことを気づかってくれていたのかも……。そういえば、あの連中なんかは、教師の前で「友だちですから、イジメみたいことは決してしません」って、堂々と言ったんだよなあ。それっきり「友だち」ということは一切信用しなくなりましたよ。だから、「なかま」とか言われたって、「へっ？」と思うしかなかったんだよ。

闇の中で足を止めて振り返る。

——そうか、あんとときに、もう少し話をしてあげればよかったのかも。「なかま」だったのかも……。7つの海をケンカしてまわったって、それってボクのこと

と？」「どこからどう考えたらいいのかもわからないままにモンモンとして」というのはボクのこと？ ああ、なんかわかってきた。大ダコのように、ボクも自分の悩みを言えたらよかったんだよ。それを教えてくれようとしたのかも……ひとけりするとか、ぎゅつとひとしめするのではなくて、あんなふうに話せたらよかったんだよ。オバコちゃんが言ってた超スローボールっていうのは、そういうことだったりしたのかも？ 大ダコの話聞いていたときにはぜんぜん思わなかったけど、本当は「なかま」だったのかも……でもなあ、こんなにまつくらにしたのはあいつなんだよ……わからない。まあ、いまになってごちやごちや思っても仕方ないか。これでどうすりゃいいのかな。いくら考えてもどうせわからないし、やっぱり「慣性の法則」で行くしかないってことなんだろうな、たぶん。

前に向かってふたたび走り出す。

雨はどんどん強くなって、どしゃぶりになる。パーカーのフードから水がぼたぼた流れ落ちて、ひっきりなしに顔をぬぐわないとならない。

——ひどすぎますよ。この雨も大ダコのせい？ 暗くてどうせ何も見えないんだけど、顔にワイパーとかつけられたら、少しは走りやすいのかも。せめてカサでもあればなあ。そっかあ、カサがあったら、あの島のガケでさっさと飛んでいて、銀色の尾羽を受け取るようなこともなかったのかもかもしれない。コインロッカーをあんなふうにパタンとしめなかつたら、カサを持っていたんだよ。カサ1本でぜんぜん違うことになっていたのかも……。

そのとき、ずっとまっくらだった前方にぽつと青白く浮かびあがったものが……

——いやいやいや、あのですね、ボクはカサっついま思いましたけど、だからって、あれなんですか？ こういうことをするからこの世界はいやなんだよなあ。

マイはスピードをゆるめ、降りしきる雨の向こうで蛍光を発しているように見えているものの十数メートルほど手前で止まる。

そこにいるのは、昔話などに出てくるまさにそのままの姿のカラカサお化

けだ。

カラカサに雨が降りそそぐ音が闇に静かに響き、カラカサに当たった雨粒が光の軌跡を描いて四方に飛び散る。

カラカサお化けは、縄跳びをするときのように両腕を左右に構え、ひざをぐっと曲げて、1本足でびよこんと跳ぶ。カランと音を立てて1本歯のゲタで着水し、大きなひとつ目玉をぱちくりさせ、カラカサを左右に動かして何かをさぐるようにしてあたりをじっと見まわす。目を大きく見開いたまま入念に見終わると、正面に向き直り、ひとつ目玉をまたぱちくりさせ、カラカサをわずかに前に傾け、目を閉ざし、ここにもいなかったというような感じで顔を伏せる。ため息をひとつつき、少し間をおいて顔をあげ、そして目をぱちつと開け、赤く長い舌をべろべろと大きくゆらし、次に跳ねる姿勢をとる。

カラカサお化けの背丈は幼稚園の子どもくらいしかなく、一度の跳躍で進めるのはせいぜい1メートルくらいだ。

——この広い海をずっとああやってきたのだろうか？

カラカサお化けは跳躍の動作を寸分違わずに繰り返して、マイの方へと進んでくる。

——何をさがしているんだろう？

カラカサお化けが、ここにもいなかったというようにひとつ目玉を閉じるのを見るたびに、胸がぎゅつと苦しくなる。

——よほど大切なものなんだろうか？ 早く見つけられたらいいのに。

カラカサお化けは前方3メートルくらいのところにカランと着水し、カラカサに当たった雨のしずくがマイの足元へも飛んでくるようになる。

カラカサお化けはひとつ目玉をかつと見開き、じっとこちらを見る。その大きな瞳に吸い込まれるようにしてマイは1歩進み、カラカサお化けの発する蛍光の中へとはいる。

「ああつ」

カラカサお化けは小さく叫ぶと、ひとつ目玉が丸くうるうるし始め、ぼろ

ぼろとなみだがこぼれ出てくる。左右の手でなみだをぬぐい、赤い舌をべろべろさせる。その姿がなんともいじらしい。

「あのう、どうかされたのですか？」

カラカサお化けへとさらに歩みよる。

「あたいは、あたいは……」

カラカサお化けはせきを切ったように、舌を上下に激しくゆらし、わあわあと声を立てて泣く。ひとつ目玉からはんぱでない勢いでなみだがあふれ、まるでスプリングラーのように四方に飛び散る。

——どういこと？

なみだの激しさに、雨とともにそれをあびながら、見守っているしかない。

カラカサお化けはさんざん泣くと、

「ああ、すつきりした」

カラカサを少しばかり開いて左右にくるっと回して最後のなみだを吹き飛ばし、そして目を大きくぱちくりさせ、ぴよんと跳ね、今度は左右を見るこ

となく、そのままマイの横を通って行こうとする。

——ん？ 行っちゃうの？

「あのう……」

つぶやくと、カラカサお化けは足を止め、

「ありがとう。もうだいじょうぶになりました」

カラカサお化けはこちらを見ずに言う。

「いまのはボクのせいで泣いたんですか？」

「いっぱい泣いたら、すっきりしたんで、あたいは行くんです」

「どうして泣いたんですか？」

「どうしてって、だって、あたいはこんなじゃないですか。こんなお化けじゃないですか。あたいと同じ人なんかどこにもいないでしょ。それが悲しくて悲しくて、それで、世界中を巡り歩いたら、もしかしたら出会えるのではないかと思って、1本歯のゲタをはいて旅に出たんです。あたいと同じ人会えたら、そのときに思いっきり泣こうって思っていたんです。それがやっ

とかなったんです」

「えっ、そうなの？」

「ありがとう」

カラカサお化けはマイの方に向いて小さくお辞儀をする。目玉がほほえむ。

マイはためらいつつ、

「でも、言っではなんなんですけど、ボクはたぶんカラカサをかぶってはいないんですけど……」

「えっ？」

カラカサお化けは目玉をカサよりも大きく開けて、マイの頭の前からつまさきまでを見て、

「あたいとおんなじでしょ」

「そう見えるんですか？」

カラカサお化けはカサをふたつ折りにしてうなずき、

「だって、そうでしょ」

マイもうなずき、

「あなたにそう見えるんだったら、きつとそうなんでしよう」

「ここで会えて、ホント、よかったです。思いっきり泣けて、こんないいことはありません」

カラカサお化けは向き直ってぴよんと跳ねる。

「で、もう行ってしまいませんか？」

「あたいはまっすぐ跳ねて行くしかないんです。あなただってそうなんですよう？ あたいとおんなじなんですもの」

「そう……」

「じゃあ、さようなら」

「さようなら」

カラカサお化けの跳躍がさつきまでよりずっと軽やかに見える。カラカサに当たる雨音もリズムカルに聞こえる。

その後ろ姿に、

「まっすぐ行ったら、きっと大ダコさんに会います。もうひとりなかが増えますよ」

「ありがとう」

カラカサお化けは闇夜に消えていなくなる。

——いまボクって、何を言ったんだろう？ 「もうひとりなかま」？ ボクがカラカサお化け？ どういうこと？ どういうことって、その通りってことなんだよな、たぶん。

前に向き直り、

——闇で何も見えないけれど、ボクもたぶん……。

カラカサお化けのように跳んで、目をぱちくりさせ、あたりを見まわしてみる。

——そっかあ、ボクはホントはこういうことをしたかったんだよ、きっと。

カラカサお化けとそっくりなことを口に出して言う。

「だって、ボクはこんなじゃないですか。ボクと同じ人なんかどこにもいな

いじやないですか。それがつらくて、何もかもやめてやれって思っ、石ころをけって旅に出たんです。ボクと同じ人に会えたら、そのときに思いつきり泣こうって……そうは思っていなかったけれど、そうは思っていなかったけれど……」

カラカサお化けのよう跳ねて行くと、雨はすつと小降りになり、細くなった雨脚を通して空に星が見え始める。

——カラカサお化けは同じだと言ってくれた。だったら、同じなんだよ。きつとそういうことなんだよ。

雲の切れ間から月が現れ出る。なお雨が残る天空に月からの光があまねく行き渡ると、

「虹だ！」

大海原に大きな虹がかかる。

「ああつ！」

マイのふたつの目がうるうるし始める。

——そうだ、泣いていいんだよ、ボクだって。カラカサお化けに出会えたんだもの。

なみだにぬれる目で虹を見あげ、

——わかったよ！　そういうことだったんだ！　色は違っていてもひとつの虹になれる。カラカサお化けも大ダコも……いろんな違った色がなければ虹にならないんだよ。ボクはゴローになりたいって思っていた。でも、ゴローが何者かわからなかった。ボクはゴローをさがしていた。そしたら、カラカサお化けはボクを見て泣いたんだ。だからボクも……。

なみだをぬぐい、

「ゴロー！」

虹に向かって叫ぶ。

——わかったよ！　そういうことだったんだ！　大ダコもカラカサお化けもゴローなんだよ。だから、なかまだと言ってくれたし、同じだと言ってくれたんだ。つまり、このボクがゴローだって言うてくれたんだよ。ボクはゴロ

ーをさがしていた。そしたら、ここにいたんだ、カラカサお化けと大ダコが。

GOROの刺繍を押さえ、

「さあ、行くぞ！」

自分に気合を入れ、虹に向かってびゅんと走り出す。まっすぐに進むこともう迷いはない。

雨がすっかりあがると虹は消え、やがてまた朝となり、青い大海原が視界に広がる。

明るくなった海をぐるっと見わたして、石ころの姿はどこにもない。

——アイツをさがしているわけじゃない。アイツがいなくてもボクは走って行く。ボクはゴローなんだからまっすぐに走って行く。それで、ウミネコに羽根を渡すだろうし、それから、もしかしたら「知恵の裁判」とかにも出ようとしたりしちゃうかも……そこまではまだよくわからないけど。

「しかし、どうなんですかねえ？」

マイは空に向かって、

——ボクがアイツをけったんだし、たぶんここにきて走りたい気持ちがあつたんだろうけれど、それにしてもアイツがこの世界に連れてきたのは疑いようのない事実だ。アイツがいなければくるはずがないもの。話を勝手にどんどん進めて、わけのわからないうちに、クジラの潮に乗ってどつかに飛んでしまつて、それつきりつていうのは、どうなんですう？

「どうなのさ？」

——まあ、どういうことでもいいんですよ、いまになつてみたら、別にいなくたつて少しも困つていませんよ。ボクはボクでまっすぐに行こうつて思つていますよ。それはボクがゴローだからですよ。ゴローだからいいんだけど、でも、途中で消えちゃうのつて、なんかあれじゃないっすかねえ、そうでしょう、やつは無責任つてことじゃないでしょうか？ ボクは別にこれでいいんですけど、だげですよ、石ころとしてはよくないんじゃないんですかねえ。だから、ゴローつていうのはこういうキャラではないんですけど、アイツがあんまり無責任なことをするから、一発言つておいてやらないといけな

いのかなあって、ボクは思ったりするんですよ。だから、言いますよ！

腕を腰に構え、胸を張って大きく息を吸い、天に向かって、

「くそ、ばか、石ころの根性わるく！ とんまのあほんだれー！ くやしかったら出てきやがれ！」

叫んで、ひとりで笑う。

「あーあ、くーだらない」

——くだらないけど、ちよつとはすつきりしたかも。

あたりをぐるっと見て、

——どなつてやってもアイツは出てきませんね。根性わるで、しかも根性なしなんだよ。

意気揚々と空を見あげていると、

「うーう、さむう」

全身がぞくぞくつとする。

はっと思った次の瞬間に、青空が一変してぱったり暗くなり、まっくろな

雲から冷たい風が吹きおろしてきて高い波がいきなり襲ってくる。

——いやいやいや、なんてこったい。これって、あれなんだよ、わかっていますよ、アイツが出てこないのはいいけど、そちらさんがまたなんですか……

さっと闇につつまれ、ぽつと炎がともり、幽霊船がどんと現われ出る。

その変化の速いこと速いこと、そこでマイもすかさず、

「愛宕山ジャンプ！」

踏み切ろうとすると、波がぱくつと足に食らいついてくる。

「いてっ！ やめろっ！」

氷の突風にあおられ、海面にたたきつけられる。

「うわーっ」

すっころがって海面に手をつくくと、べたつとひっついて、どうにも離れなくなる。

——おい、おい……

これで手も足もまったく動かない。

——アイツのせい？ ボクが叫んだのが気に入らなくて……だったら超根性わるじゃんかよお。

背中がぞくぞくつとして、肩越しに振り向くと、幽霊船がぐぐつと迫ってきている。

「くそ、ばか、幽霊船のあほんだれ！ あっちに行け！」

ののしつてもまったく通用しない。

シュウシュウと炎の燃える気味の悪い音がマイの耳もとにべちやつとこびりついて離れなくなる。

そのまますべてがべちやつと止まってしまふ。波はひとつの形から微動だにせず、マイは海にはりついた姿勢で動けず、恐怖心だけは厳然と存在したまま、どれほどの時間がたったのか、それを計る時計までも止まり、またしても6500万年たったかどうかさえもわからない。

完全静止を破ったのは、ヒューツと笛のような高い音。

——なに？

シユウシユウと燃える音が耳から取り去られ、マイの感覚がよみがえる。

——うーん、でも動かない。

海面に手をつけて肩越しに見ている幽霊船の炎の彼方の闇に、白く小さなものが現れる。

——あれだ！

こちらへと向かってきてそれは見間違えるはずがない。

——これは助けにきてくれたってこと？

石ころが炎をかすめ、幽霊船とマイの間の海面にぼちやんと落ちる。

マイの恐怖心がほどけ、体が動くようになり、瞬時に海面から手を放して立ち、

「ありがとう！」

さっきののしった反省をこめてお礼を言う。石ころがそこにいてくれると、いろいろあったのはさておいて、安心感があるのは否定できない。

石ころはその場で3回ほど輪を描いて旋回する。方向を定めてから進み出すのかと見ていると、ふわふわ上昇を始める。

——早くこんな幽霊船から離れて前に行きましようよ。ボクはついて行くから……。

石ころは炎と同じ高さにまで達すると、そこでくるくるまた旋回する。

——飛んで行く準備なのかなあ。

そして、石ころはぽいと飛んだことは飛んだのだが、炎の中へと飛び込んでしまう。

——ん？ どうした？

石ころは炎を通り抜け、舳先の上に乗れり、傾斜に従ってころころところが。下からは見えなくなつて、船の中にはいつて行って、コトンと音がする。

——えっ？ 行き先は船の中？ ついて行くつて思ってたけれど、そういうことではなくて、海を走って……。

幽霊船はギシギシときしみながら向きを変え、マイの前に舷側がぐつとそ

そり立つようになる。

上からすると縄梯子がおりてくる。

——またですか。

船べりに石ころが顔をのぞかせ、いかにも合図するように上下に動く。

——乗れって言うてるの？ ついて行くって言うっちゃったけど……。

ぱたぱたと風に揺れる縄梯子におそろおそろ手を伸ばす。あちこちほつれてぼろぼろで、少し引っ張っただけでピチツといやな音を立て、いまにも切れそうだ。

石ころはせかすように船べりをコンコンたたく。

——わかりました、行けばいいんでしよう。行きますよ。

半分ふてくされて縄梯子をぐいと引っぱって足をひっかける。

——アイツがこいと言ったんだから、まさか切れたりはしないだろう。

案外するするとのぼれ、船べりにまで達し、石ころとともに甲板におりる。

炎の光で、船の上がぼおっと見えている。学校の体育館を縦に半分にした

くらいの広さで、平らな甲板だけがある。

——アイツがいるんだから、きつとなんとなるんだろう。もしかすると、いよいよここが「知恵の裁判」の場ってこと？ どうしてもここに乗せようとしたんだから……。

炎がすつと消え、まっくら闇になる。

——幽霊が出てくる？

ぞくつとして、マイが身構えると、

「こんどは君の番だ」

低い声がする。

——えっ、君ってボクのこと？

もう一度ぞくつとし、思わず半歩後退して、船べりに背中を押しつける。

別の高く細い声が、

「ええと、では、私ですね」

——ああ、ボクじゃないんだ。

何も見えず、声だけがする。

「私はあの日あの時、いつものあの場所にいました。そこは、日に一度だけ、小さなスタンドからの光がパツとさしてくる場所でした。私は光が苦手なので、光がくると急いで紙と紙の間にもぐりこむのでした。カリカリと鉛筆の音がしばらくして、パタンととぎされると、光は消えてまた安らかな闇にもどるのです。毎日毎日それが繰り返され、先祖代々そこをすみかとして、もう7年とか8年とかになっていました。私は生まれてからずっとその場所の匂いとともに生きていました。匂いの半分は紙で、半分が鉛筆の粉でした。カリカリと鉛筆が動いた跡は、その鉛筆を動かしている人がその日にしたこと、その日に思ったことなどの記録となるのでした。光は苦手でも、カリカリという音はなんとはなしに心地よいものでした。しかし、あの日に限っては、光がさしてくるよりも前にあの時がきて、私はいきなり塩辛い水の中でもみくちやにされ、あつと思う間もなしに死んでしまい、あの場所の匂いの中で安らぐことはそれっきりなくなってしまうのです」

声はやみ、舳先の炎がぼつともり、1冊のノートと、その開かれたペー
ジの上の小さな虫が、闇の中に浮かびあがる。

炎はすぐに消える。

——死んでしまったと言ってたけど、いまのは幽霊？

「こんどは君の番だ」

低い声がすると、マイはまたぞくつとして、もうそれ以上はさがれないの
だが、船べりに背中をぎゅつと押しつける。

別の声がする。

「ええと、では、我輩かな。我輩はあの日あの時、いつものあの場所にいた。
あの場所はふんわりと心地よく、午後になると窓から日がさしこみ、なんと
も暖かくて、我輩はいつもいつもうつらうつらと幸せな時間をすごしていた。
日がかげつてくると窓辺はひんやりと冷たくなり、次の場所に移った。その
うち夜になると、あの人が帰ってきた。ガチャガチャとカギの音を聞くと、
あの人が我輩に何をしてもらいたがっているかがわかった。だからといって、

その通りにするほど我輩はすなおではなかった。ちよいとじらしたり、別のわざをしかけたりした。あの人もそこところは心得ていた。あの人とは10年近くも一緒に暮らしていた。あの日は、あの時の少し前に、大きく揺れた。我輩は不覚にもころげ落ちて、ソファの下にもぐりこんだ。あちこちからいろいろなものが落ちてきた。そのうちおさまったので、はい出してみる。と、部屋の中はものすごいことになっていた。これだけの大仕事をまさか我輩がしたとは思わないだろうけど、あの人が帰ってきたら驚くだろうなと思った。それからいろいろなものを乗り越えていつもの場所に行き、ちよつとうつらうつらし出したところで、また揺れた。2度目だったから我輩は面倒くさくて動かずにいた。そしてまたうつらうつらしていると、とんでもなく大きな音とともに窓が壊れ、塩辛い水がどつとはいってきた。我輩はもみくちゃになり、わけもわからずに死んでしまった。あの人とはそれっきりになった」

炎がぼつとともり、白いネコの姿が闇に浮かびあがる。

——塩辛い水？　もしかしてわかったかも。あのとときの津波？

炎はすぐに消え、

「こんどは君の番だ」

低い声がまたする。

ぞくつとして、別の話が始まる。

「ええと、では、ぼくでいいですか。ぼくはあの日あの時にはまだ眠っていたので、あの日あの時に何があったのかを知らずにいました。その後で春になってからぼくは目を覚ましました。芽を伸ばし、少しだけ大きくなったところで、水をたつぷりとたたえた広い場所に植え替えられました。初夏の日を浴び、初夏の風を受けて、ぼくはどんどん大きくなりました。土はぼくにたつぷりと栄養を与えてくれ、水はぼくの全身をめぐって元気を与えてくれ、日の光はぼくの活力のもとでした。夏の間にはぼくは父や母と同じように成長し、そして稔りの秋を迎えました。しかし、ぼくは父や母とは違って、稔らせたものをだれかに食べてもらうこともなく、次の世代のもとになることも

なく、むなしく棄てられてしまいました。父や母のときと、光は同じでも、土と水は違っていたのです。ぼくが悪いわけではなかったのです」

炎がぼつともり、1本のイネが浮かびあがる。

炎はすぐに消え、

「こんどは君の番だ」

低い声がまたする。

今度は一段と強くぞくつとして、

「ええと、では、私でいいのでしょうか。私はあの日あの時……」

いままで以上に細い声で、ぼそぼそとほとんど聞き取れない。苦しい息づ

かいで、しぼり出すのがやつとというような声だ。

話の内容は十分にわからなくとも、悲痛な思いは伝わってくる。

——やっぱりあのとときの津波。そして原発の事故なんだ。いつからこのような話をしているんだろう？ ボクにこれを聞かせるために石ころは連れてきたのか。

マイ自身は小学生だった。大きな揺れの記憶と、テレビなどで見たさまざま
まな映像が思い出されてくる。

「すべては消え、もうもどってはこないのです」
炎がぼつともる。

3Dのように、船の上にひとつの風景が色彩豊かに大きく広がる。

——ああ、なつかしい……。

マイは郊外の住宅街で生まれ育ったので、田畑や林の織り成すこのような
風景に親しみがあるわけではない。それでもしみじみとした情感がわいてく
る。

闇がその風景を消す。

——いまのは、たぶん、ふるさとということ。

「こんどは君の番だ」

ぞくつとして、

「ええと、では……」

——いつまで続くのだろうか？ 震災で失われたものはきっと数知れなくあるのだろう。

ころころと音がする。

——行くの？

まだ聞いていたいし、聞いていなければならぬと思いつつも、そうするのがつらくなり始めてもいたマイは石ころの後を追う。

闇の中をしばらく歩くと、

「こんどは君の番だ」

さつきまでとは異なる声が別の方向からする。

石ころは止まり、マイはまたしてもぞくつとする。

——やっぱり幽霊なんだ。

「ぼくは恋をしていたのです。あのとき、男といたらぼくとあいつだけで、女は彼女だけでした。ぼくは彼女に向かって歩み始めました。あいつはそのときに、ぼくの恋を邪魔しようと呪いの言葉を発したのです。」

『大地よ裂ける！ 大地よ裂けて海になれ！』

ぼかなことを言うやつだと、ぼくは鼻で笑い、歩き続けました。あいつは声を大きくして、

『大地よ裂ける！ 大地よ裂けて海になれ！』

また叫んだので、

『ぼかはよせ！』

あいつに向かって言ってやりました。そしたら、あいつはもともっと大きな声で叫びました。

『大地よ裂ける！ 大地よ裂けて海になれ！』

どうしようもない愚か者と思ったそのときです、遠くでかすかに妙な音がし、地面がぶるぶると揺れたのです。ぼくはかまわず歩きました。

ドドドーっと地響きがしました。

『あはは、あはは』

あいつがかん高い声で笑いました。

ぼくは彼女を見ました。

ドーンドーンと大きな音が地の底から響いてきて、地面は上下左右にとんでもなく大きく揺れ、メシメシと恐ろしい音がしました。

ぼくは彼女の方へ急ごうとしました。だけど、揺れる地面にしがみついているのがせいっぱいでした。ピシピシと地面が裂け始めました。遠くからつつと裂け目が走ってきて、ぼくと彼女の間へと伸びてきました。ぼくはあせりました。しかし、地面はぼくのすぐ目の前でぱっくりと口をあけ、

『あはは、あはは』

と、笑い続けるあいつの横が割れ、なんと、あいつと彼女は裂け目の向こう側に、そしてぼくだけがこちら側になってしまったのです。

ぼくはいまいますのあまり、頭が破裂しそうになりました。それで、ぼくはあいつに負けまいと、呪いの言葉を発しました。

『何もかも波に呑まれてしまえ！』

あいつよりもずっと大きな声で叫ぶと、どおっと激しい勢いで波が押し寄

せてきました。ぼくがこの世で最後に聞いたのは、波にのまれながらも笑っているあいつの笑い声でした。波がきたあとは大きな広い海となって、ぼくたちはすっかりいなくなってしまったのでした」

炎がぼつともり、小さなカタツムリが浮かびあがる。

——いまのどういいう話？ さっきの津波の続き？ でも少し違うような……。
「こんどは、君の番だ」

「私たちは心がかたまつて体が動かなくなる病いにとりつかれていました。悲しみがひどく度を過ぎて、そんな病いになつてしまったのです。病いがまだなかった昔には、自由に海を泳ぎ魚をふんだんに食べ、おなががいつぱいになると、そこらにたくさんある小さな島にあがってのんびり休むという暮らしをしていました。みんなが島にあがると、どの島のどこもかしこも私たちで埋めつくされました。私たちは数えきれないほどたくさんいたのです。私は島の高い岩場にいたときに、急に悲しみの病いにとりつかれました。たまたま足場が悪かったのが幸いしたのでしよう。ころっと落ちて、ななめ

にすべってストーンと岩と岩とのすきまにはまってしまいました。

身動きできないままに私は海の様子を見ていました。その日までに、私たちは215羽にまで減ってしまいました。何千万羽もいたなかまの最後の生き残りでした。私は病にかかるのを恐れていました。215羽になったなかまのみんながもしも病いにかかったら、私たちは滅んでしまうからです。でも、悲しみが湧いてくるのを止めることはできなかったのです。

私たちはなんとという生き物なのでしょう。海上に浮かぶものがあると、乗ってみずにはいられないのです。私たちの海に初めて人間が現われたとき、海を泳いでいたなかまはその習性に従って、人間のボートにぴよんぴよんと飛び乗りました。飛び乗って、これはなんだときよろきよろと見回しました。なかまが船いっぱいひしめきあつてきよろきよろしている、人間たちは太い棒をなかまの頭めがけて振りおろしました。なかまは簡単に命を奪われました。なかまが殺されている間にも、習性に従ってぴよんぴよんボートに乗り続けるなかまがいました。人間たちはどんどんぐり殺し、なかまの死

骸でボートをいっぱいに行ってしまうました。

そのときから人間たちは何度もやってくるようになりました。私たちはボートに飛び乗ればどうなるのかわかっていても、あいかわらずぴんぴんと乗り続けました。そうしなければいられないのです。そのころから悲しみの病が始まりました。病いにかかると体がまったく動かなくなってしまうので、人間たちにより容易に殺されてしまうようになりました。

そして、215羽にまでなったあの日、人間たちが姿を見せると、私だけでなくなかまのすべてがいっせいに病いにかかり、岩の上でちんとかたくなつて動けなくなつてしまいました。人間たちは島にাগり、棒でなかまをなぐり殺しました。

『ちえつ、たつたこれだけか』

人間たちは214羽を殺すと、そう言い捨てて、ボートをこいで行つてしまいました。私だけは見つけられずに、岩のすきまに残されました。私は悲しみに満たされ、やがて日が暮れ、星が夜空にひとつふたつと数を増してい

く中で死んでしまったのです」

炎がぽつとともり、小さなペンギンに似た鳥が浮かびあがる。

——あれはだれ？

「次は君の番だ」

「あつしですかい？ どなたさんにもお先に失礼いたしやすが、さつきからずつと聞いておりやしたが、いつまでこのようならい話が続くんでやしようか？」

「乗り合わせた全員が話し終わるまでだ」

「全員ですかい。そいつはどうも……。ひとつの話が終わらないうちに、新しい乗客がどんどん増えているではありませんか？」

「この世から失われた生き物の最後の1匹、あるいは1本、あるいは1羽が乗り合わせるこの船の乗客はここるところ急激に増えている。いつ終わるとも知れぬが、みなに話してもらいたい。いまの話は150年前に絶滅したオウミガラス、さつきの話は何億年も前に絶滅したカタツムリだ。順番はい

つくるかわからない。しかし、必ず話するときがくる。乗客のみなは気長に待ってもらいたい」

「あつしに順番がまわってきたのは幸運ということですかい。話させていた
だきやす。

あつしは曲がったことが大きらいな性分で、まっすぐに伸びあがって行きたいという一心だけで生きておりやした。地球のなかまたちがいい感じに暮らしておりやすと、あつしらもいい感じにすうっと高く伸びあがることができやした。そうでないときには、気持ちがあつかつて高くなることができやせん。あるときから、あつしらはむかつかつて、それがあんまりひどいんで、根もとから腐るようになって、ばたばたと倒れてしまいやした。

あつしらは、まっすぐにこだわりすぎてほきんと折れたりしてしまわないう、ぐぐつとしなることができやす。しなるのは曲がるのが好きだからではなくて、まっすぐでいたためのわざでやす。ところが、人間たちはあつしらをしならせて曲げたままで使うことを思いついたのです。あつしらは『御

免こうむりやしよう』って言ってやってたんでやんすが、人間たちはおかまいなしにあつしらを曲げて輪っかにしてみたり編んでみたり、何よりもいやだったのは、まっすぐになりたいというあつしらの気持ちを悪いことに使ったことでやんす。あつしらは弓というものにさせられてしまったんでやす。まっすぐになりたいという気持ちが強ければ強いほど、矢を飛ばす力が強くなり、あつしらのために多くの命が奪われるのを見なければならなかったんでやんすよ。

あつしらは悲しくてならなかったので、『弓にはしないでくれ』と人間に抗議しやした。人間は『地球に平和をもたらすには弓が必要だ』と言いやした。『弓のない時代は平和だった』とあつしらは言いやした。『いまは情勢が変わったのだ』と人間は言いやした。『地球の生命の繁栄の基盤となっていた進化の原理に反するようなことは許せない』とあつしらが強く主張すると、『原理に拘泥していたのでは平和は樹立できない。いまは理解されなくても、将来は必ず納得してもらえる』と人間は言いやした。ねじ曲がった人間の論法に、

あつしらはむかつてむかつて根から腐って滅んでしまったんでやんす」
炎がともし、まっすぐ高くへと伸びる竹の姿を浮かびあがらせる。

マイははるかな竹の先端を見あげ、

——ギアナ高地でのあの「愛宕山ジャンプ」も竹にとつては迷惑な行為だったんだろうか？ あれは、イカサマの黒幕を見てやろうとしたんだよ。でも、正体はわからなかったんだけれど。

竹の姿が消える。

「次は君の番だ」

——これは「知恵の裁判」？ 人間のよくない行為が次々に告発されているっていうこと？ もしかして、黒幕っていうのは……ああ、そうなのかも。ほかのだれでもなくて、それで被告として呼ばれているってこと？ だって、ろくでもないこの世界のボクもたしかにその一員なんだから。

にわかに緊張してくると、石ころのころがる音がする。

——行くの？ 裁判はいいの？

少しほっとして歩み出すと、

「あたしでいいのでしょうか……」

ささやくような声が背後に聞もろともに消え去り、

——まぶしい！

いきなりの明るさに、目を押さえてしやがみこむ。

次第に目が慣れてくるのを待って、指の先を徐々に細く開ける。

晴れあがった青空のもと、穏やかな海上にマイはいる。

——幽霊船はどこ？

立ちあがって見まわすと、海には石ころとマイしかない。

——あの話はもう終わった？ ということは、「知恵の裁判」はまだだった？

石ころが海面をころがり出す。

——ついて行くって言ったし、どうせ前には行くって決めているし……。

石ころの後を追って走る。

——これって、もとの状態にもどったっていうこと？ これでほっとしてし

まっっているというのものなんかちよつと悔しいかも……アイツがいなくなつたつて、ボクはボクでやって行けるはずなんだけどなあ。